

震災ボランティア派遣 FAX通信⑤

2011年4月28日



各組合・地域労連

御中

青森県労働組合総連合

青森市大野字若宮165-19

TEL 017-762-6234、FAX 017-729-2186

メール ao110@kenrouren.jp

【発信者】事務局長 有馬美恵

感想

ボランティアに参加して

4月17日から、5泊6日のボランティアで大船渡に行ってきました。

やっぱり瓦礫の山は、普段見ていたテレビ画面と実際に見るとは大違い、その悲惨さにショックを受けました。

民宿のある崎浜漁港では、道路沿いに防潮堤があり、その高さは私の身長3倍くらい、正に見上げる高さですが、そのはるか上を津波が襲ったことがはっきり分かります。家がひっくり返って窓からカーテンが揺れていたり、車が逆さまになっていたり、線路がアメ状に折れ曲がり、海岸からはるか300メートルも遠く離れた場所に大きな漁船が横倒しにされていたり、驚きを通り越して恐怖さえ感じる光景がこれでもかと迫って

大船渡で6日間ボランティアに参加した今さんから、感想文が寄せられましたのでご紹介いたします。第2チームは5/4~6に入ります。連休明けのボランティアが少ないようですので、みなさんぜひご検討ください。

てきました。

このボランティアに参加するに当たり、私なりに心に期するものがありました。酒は飲まない、食事はどんなに質素でも我慢する、風呂なんか入れなくてもいい、そういう固い意志は1日目でもろくも崩れ去りました。通された10人部屋の1号室は、実は宴会部屋だったので。また、宿の食事は申し訳ないくらい豪華で、毎日風呂にも入れました。夕食後はほとんどの人が1号室に集まり酒を飲みながら班毎の報告と思い思いの感想や意見交換をします。これ



崎浜漁港の防潮堤

が消灯時間の10時まで続きます。一晩で一升瓶4本も空になった日もあります。本当にこれでいいのかと少しは思ったりもしました。ただ、朝になるとみんなさすがにシャキッとしていて、日中は口もきかず黙々と与えられた任務、作業に従事していました。この辺はさすが全国から志願してきたプロの人達だけのことはあるなと感心したものです。もちろん私も古傷の背骨を守るためコルセットをギュッと締めて人に負けないくらい力を出し切ったつもりです。

滞在期間中、いろんな体験をさせていただきました。涙を流し声を詰まらせながらお礼を言ったおじいさんにみんなで思わず拍手してしまったこと。失うものがないくらい失ってしまったのにお礼にと宿にビールを届けてくれた被災者のこと。途方にくれながらも気丈に明るく振舞ってくれた老夫婦のこと。傾いた3階建てのマンションで

渡されたヘルメットをしっかりとかぶり恐怖の中で作業したこと。支援物資の分別では作業が遅々として進まず、中学校の体育館にうずたかく積まれた支援物資を見上げるたびに、分別よりもとにかく早く届けるべきではないのかと少し疑問に思いイライラしたこと。などなど、いまもきりがなくらい鮮明に思い出します。

私ごときが被災者にとってどれほどの力になれたのかは分かりませんが、この経験は自分にとって非常に有意義なものであったし、少なくとも行ってよかったなとつくづく思っています。特に熊本や愛媛、岡山、京都、北海道などなど、全国から集まった人達との交流、若い女性たちのびっくりするほどの頑張り、軽い気持ちで参加した人は一人もいなかったこと、本当に人間臭さを満喫した5泊6日のワープでした。

高田松原では津波でなぎ倒された7万本の松のうちたった一本だけ助かった松を「希望の松」と命名したそうですが、これからは、この松のように被災地が必ず復興することを信じて青森の地から応援することにします。

(青森県労連ボランティア第一チーム 今正則)



現地ではおそろいのスタッフジャンパーを着て作業する



◆自治労連が自転車を陸前高田市に提供

青森自治労連では4月25日、自治労連本部が設置した陸前高田市の支援センターに出発。軽トラックに新品の自転車6台を載せて、青森から300km、陸路5時間かけてたどりつきました。自転車は支援センター事務局を通じて、陸前高田市の災害対策本部に提供されました。

青森自治労連も 独自に奮闘中!